

追悼文

盲信への懐疑、愚直な歩み ——黄意元氏の純粋な生涯を悼む

Skepticism towards Blind Faith and a Straightforward Approach
— Commemorating the Good Life of the Late Hwang Ui-won

崔碩榮（フリー・ライター）
CHE Sukyoung

私が初めて黄意元（ファン・イウォン）氏に出会ったのは、2009年のことだったと記憶している。当時、私は10年間にわたる日本での生活に区切りをつけ、韓国に帰国したばかりだった。日本滞在中からインターネットを通じて韓国の掲示板やブログで言論活動を続けており、2000年代半ばからは左派系新聞のウェブ版コミュニティにも深く関わっていた。そこでの交流を通じて、実社会でも数人と出会うようになったが、その中の一人が医師のH氏だった。彼は韓国の伝統医療（韓医学）や医療システムの問題点を、独自の視点で鋭く批判していた人物で、ネット上で私と非常に気が合った。ある日、彼から「ここで活動してみないか」と強く勧められたサイトこそが、黄氏が設立したインターネット討論サイト「skeptical left（懐疑的左派）」であった。

当時、社会に対する批判的なエッセイを書き始めたばかりの私にとって、「論客」という響きはいささか気恥ずかしいものだったが、黄氏とH氏は私の文章を温かく迎え入れてくれた。やがてサイトの会員が集まるオフ会が催され、私は初めて黄氏と顔を合わせた。黄氏は、私がネット上に綴っていた「韓国の反日感情」を批判する文章を読んだと言い、ぜひ自身のサイトにも寄稿してほしいと求めてきた。日本での会社員生活を通じて感じたことを書き留めた、アマチュアの拙い内容だったが、彼は、韓国の反日感情が誇張され、非理性的であり、誤導によって生じている面が多いという私の考えと、正確に一致する見解を持っていた。

私と黄氏は、その場で深く意気投合した。その時、彼が「ぜひ一度読んでみてほしい」と手渡してくれた本がある。後に『帝国の慰安婦』という著書で大きな話題となる、朴裕河（パク・ユハ）教授の『和解のために』であった。黄氏は私と出会う前から、韓国の反日感情に対して強い批判意識を持ち、それを変えていこうという意志を抱いていた。そして、同じ視点を持つ朴教授を直接訪ねて対話を重ねるなど、少なからぬ影響を受けていたようだった。恥ずかしながら、私はそれまで朴教授の名前すら知らなかった。黄氏から譲り受けたその本を読みながら、私が最も強く感じたのは、朴教授の「勇気」だった。韓国において自国批判を行うことには計り知れない社会的リスクが伴う。それにもかかわらず、日韓関係を語る上でこれほどまでに自国を冷徹に批判するというのは、並大抵の勇気ではない。

私にとっては新鮮な衝撃だった。黄氏は朴教授を反日強迫観念を打ち破る重要な人物と考え、一種の「連帯」を構想していたようだが、それは具体的な形を結ぶまでには至ら

なかったと記憶している。その時は、朴教授の後の著書が日韓両国を激しく揺るがす火種となり、一人の学者を終わりの見えない裁判闘争へと引きずり込むことになるとは、想像すらしていなかった。

＜skeptical leftの記憶 — 梁信奎に傾倒した青年＞

黄氏の足跡を語る上で、2006年に立ち上げた「skeptical left」の存在は外せない。現在はずべての機能が停止し、間もなく消え去る運命にあるが、黄氏が世に名を知られる契機となった場所である。このサイトは「韓国の科学的懐疑主義」を標榜し、迷信や代替医療の非科学的な要素に対する批判のみならず、政治・社会問題に関する自由な意見交換が行われる討論の場であった。あらゆる分野に対してタブーがなく、参加者同士の誹謗中傷も起きない、比較的成熟した議論空間であったことが最大の長所だった。

そもそも彼がこのサイトを立ち上げた理由は、彼が尊敬してやまなかった梁信奎（ヤン・シンギュ）元ニューヨーク大教授を追悼するためであった。梁教授はソウル大学物理学科を卒業後、米国へ留学してMITで博士号を取得し、ニューヨーク大学で情報技術を教えていた才気溢れる人物だった。彼は韓国のインターネット黎明期からオンライン上で活発な意見発信を行い、アンチ朝鮮日報運動（左翼主導の朝鮮日報拒否運動）を皮切りに、精力的な論争を展開して多くの人々を魅了した。その熱烈な支持者の一人が、まさに黄氏だった。黄氏は韓国社会のオピニオンリーダーたちに積極的に連絡を取り、意見を交わすことを好む人物であり、梁教授を「師」と仰いでいた。しかし2005年、将来を囑望されていた梁教授はうつ病により、45歳の若さで自ら命を絶ってしまう。この突然の死に衝撃を受けた黄氏が、師をしのぶ意味を込めて作ったのが「skeptical left」だった。彼はこのサイトを通じて、梁教授が目指した公正なインターネットの討論空間が実現することを期待していたのである。

＜skeptical leftの性向と特徴＞

サイト運営において、黄氏が初期に最も力を注いだのは「韓方治療」に対する批判だった。韓国の伝統医学は科学的エビデンスに乏しく、ナショナリズム的な理由から維持されているにすぎないという彼の容赦ない指摘は、医療・科学分野の従事者から強い支持を集めた。しかし同時に、韓国の韓医学界を敵に回すこととなり、非難や訴訟の脅威に直面した。現に参加者だった医師のH氏は、法廷に立つ羽目になった。

その後、2008年に韓国社会を揺るがした「狂牛病騒動」の際にも、サイト内では白熱した議論が交わされた。米国産牛肉への恐怖を煽る輸入反対運動は、「食品安全」よりも「政権批判」のために政治的に利用された側面が強かったが、サイト内にはファクトを重視し、この狂乱に批判的な立場を取る者が多かった。しかし、全員がそうだったわけではない。自由な討論を志向しながらも、自身の政治的スタンスという枠組みから自由になれなかった個人もまた存在した。だが、感情の生き物である人間が、完璧に中立であることは極めて難しい。それは運営者であった黄氏にとっても同様だった。後年、彼がサイト内で批判的な意見を削除するなど、一方的な運営を行っているという不満が高まり、参加者た

ちが分裂、事実上の解体へと向かったことを考えると、彼もまた自身の執着から自由になれなかったのではないかという思いがよぎる。

＜科学的懐疑論から歴史的な懐疑論へ＞

2011年、黄氏が政治・社会時評週刊誌「メディアウォッチ (Media Watch)」へ主たる活動の舞台を移したことで、「skeptical left」は事実上の活動停止状態となった。メディアウォッチは、アンチ朝鮮日報運動から出発して、後に右派論客へと転向した邊熙宰 (ピョン・ヒジェ) 氏が運営する媒体であり、似たような経験を持つ黄氏と邊氏は深く意気投合していた。私が黄氏としばしば顔を合わせるようになったのもこの頃だった。科学的懐疑論を中心としていた彼は、週刊誌の編集を任されるようになり、「歴史的・政治的懐疑論」の批判へと、本格的に身を投じることになる。

彼は、韓国人の根深い反日感情が、政府やメディア、学界の傍観と歪曲によって誇張されていると考えていた。そこで「日本の鉄杭説」や「独島問題」「慰安婦」「徴用工」といったタブーに、敢然と挑戦し始める。私が彼から原稿を依頼されたのは、まさにその時だった。私は2009年に、韓国の民族主義、反日扇動を批判する『キムチ愛国主義』という本を出版していた。その内容を気に入った黄氏は、私に「反日強迫観念」を批判するコラムを書いてほしいと求めてきた。その一方で、彼が憂慮していたのは、自分が支持層として引き込みたい韓国の保守右派もまた「反日強迫観念」から抜け出せず、反日の誤りを指摘されることを負担に感じているという事実だった。それは正確な指摘だった。韓国では、反日勢力を批判する者には「親日派」という政治的致命傷となるレッテルが貼られるため、右派政治家すら毅然とした態度を取れない。そのため、彼はメディアウォッチから独立し、反日煽動を告発する新たなサイトの運営も模索し始めていた。

私も彼の趣旨に共感し、連載を快く引き受けた。原稿料はなかった。零細メディアを運営する彼の懐事情はよく分かっていたため、原稿料など最初から期待していなかったし、こちらからその話を切り出したこともない。同じ志を持つ者同士の間で、言葉にせずとも結ばれた「暗黙の了解」であった。そうして始まった寄稿は1年半ほど続き、私は主に反日感情を煽る韓国メディアの記事、親日派狩りの矛盾、日本に対するダブルスタンダードなどを批判する記事を書き続けた。反日感情が強い韓国社会の逆鱗に触れる内容が多かったが、購読者数が少ない零細メディアであったためか、あるいは私の力不足ゆえか、幸いにも大きな反響はなかった。もし認知度の高いメディアで発表していれば、私は凄まじいバッシングに遭っていただろう。

私の個人的な事情で連載が中断された後も、彼との共同作業は続いた。その頃、彼が新しく始めたのが「論文検証」の分野への進出だった。政治家や著名人たちの、論文における盗作や切り貼りを暴く作業であり、時に主要紙のニュース面を飾るほどの影響力を見せた。李在明当時城南市長や曹国 (チョ・グク) 元法務長官をはじめ、権力の中核にいた人々を次々と告発した。日本にいた私は、彼の頼みで必要な日本語の論文や書籍を搜索して資料を提供するなど、その作業を一部手伝っていた。彼の論文検証において特筆すべきは、対象において「左右の区別がなかった」ことだ。保守右派路線の媒体でありながら、身内の右派政治家の盗作も徹底的に追及した。身内を庇い合う韓国の言論風土に

において、この姿勢は彼の強靱な一本気さを物語っている。ただ、私は当時、彼が政治問題に深く入り込みすぎていることを危惧していた。正しいと思えば、空気を読まずに突き進む彼の行為は、悪意ある勢力からの報復を招きかねない、と見ていたからだ。

＜李宇衍博士との出会い＞

2015年、私はある論文に出会う。後に日韓両国でベストセラーとなる『反日種族主義』（2019年）の共同著者の一人、李宇衍（イ・ウヨン）博士が執筆した「戦時期日本の朝鮮人労務動員と炭鉱の労働環境」（2015）である。韓国で「拉致同然の強制連行」や「無給に近い強制労働」として定説化していた朝鮮人労働者の実態が、誇張や誤認に満ちていることを実証的に指摘する内容だった。読み進めるうちに、まさに目から鱗が落ちる衝撃を覚えた。それまで整理がつかないまま疑問として残っていたパズルが、ようやく解き明かされるような心地だった。一言で言えば、戦時期の朝鮮人と日本人の間にあった「賃金格差」は、民族差別によるものではなく、あくまで「熟練度」や「勤続年数」の差によるものだという検証である。

当時の韓国では、こうした視点に触れる機会は何もなく、極めて新鮮に映ると同時に、「被害者」としての立場に固執する社会がこの主張を受け入れられるか、懸念を抱いたのも事実である。案の定、論文が報道されると、韓国社会は即座に激しいアレルギー反応を示した。日本の労働政策を賛美したわけではないにもかかわらず、「植民地近代化論を支持する研究」（国民日報、2015年12月30日付）などと拡大解釈され、李博士は「親日派」のレッテルを貼られて非難の的となった。黄氏がこの論文に強い関心を示したのもほぼ同時期だった。私と黄氏が事前に意見を交わしたわけではなかったが、互いにSNSなどを通じて李博士と連絡を取り合っていたことを、後になって知る。内向的な私とは対照的に、黄氏は凄まじい行動力の塊だった。国内外の著名な研究者や論客に躊躇なく連絡を取り、共同作業を提案する。この積極性こそが彼の最大の長所だった。

『反日種族主義』が出版される前、2016年か2017年の冬だと覚えているが、李博士が所属していた落星台経済研究所の近くで私と黄氏、李博士の3人で集まり、酒を酌み交わした記憶が今も鮮明に残っている。真実を語ることを恐れない研究者と、固定観念化した社会の「常識」を覆そうという意欲に満ちた言論人。互いに共感する部分は多く、時間は和気あいあいと流れた。これ以降、黄氏は韓国社会最大の聖域である慰安婦・徴用工問題へ、さらに本格的に心血を注ぐようになっていく。

＜大統領弾劾事件に巻き込まれる- 突然の拘束＞

しかし、その鋭い告発活動は、彼に過酷な試練をもたらすことになる。2018年11月、黄氏は逮捕されるという事態に直面した。原因は、朴槿恵前大統領の弾劾の決定的な引き金となった、「タブレットPC報道」を巡る疑惑提起だった。

韓国の大手メディアJTBCが、朴前大統領の古くからの知人であり、側近と報じられた一般人の崔順実（チェ・スンシル）氏のものとして報じたタブレットPCについて、黄氏とメディアウオッチは、実際には他人の遺留品であり、データが後から挿入されて捏造され

たものであるという疑惑を執拗に主張し続けた。主要メディアはこの主張を黙殺したが、メディアウォッチ側が最初に報じた放送局（JTBC）と記者たちへの批判の手を緩めなかったため、名誉毀損容疑で告訴されたのである。結果、2018年12月、邊代表と黄氏はそれぞれ懲役2年と懲役1年の実刑判決を言い渡され、電撃的に収監された。報道機関に対する疑惑提起を理由に懲役刑を科し、法廷拘束するというのは、韓国の言論史において類を見ない異例の事態だった。彼らは表現の自由に対する深刻な侵害であると抗弁したが、裁判所に受け入れられることはなかった。

2019年の初め、私はソウル拘置所へ黄氏の面会に赴いた。冷たいアクリル板越しに向き合った黄氏は、思いのほか晴れやかな表情で、拘置所の中で普段読みたかった多くの本を読んでいる、と気丈に語ってくれた。あの時の姿は、面会に来た友人たちを安心させようとする、彼なりの配慮だったのではないかと、今にして思う。それから6ヶ月後、保釈申請が認められて自由の身となったが、事件関係者との接触禁止や出国禁止など厳しい制限が課され、言論活動は大きく狭められた。四方を塞がれた状況の中で、彼が新たな突破口として見出したのが出版事業であった。

＜保釈後の活動―「問題作」を次々と出版＞

彼は保釈後、朴槿恵前大統領の弾劾事件や、日韓の葛藤の火種である慰安婦・徴用工問題、さらには中国共産党への批判本など、多様な書籍の刊行に尽力した。主に海外で出版されながらも、韓国の出版界から忌避されている「問題作」をあえて扱ったのである。その中には日本の西岡力氏や秦郁彦氏、米国のマーク・ラムザイヤー氏など、既存の出版社が敬遠する海外の学者の著作が含まれていた。韓国の読者が触れる機会すら奪われていた視点を、翻訳を通じて世に紹介した活動は、彼の旺盛な行動力と積極性を如実に示す足跡であった。むしろこうした出版活動こそ、彼の長所が最も活きる分野ではなかったかという思いすら抱かせる。

出版活動に専念していた彼と、私が最後に連絡を交わしたのは2025年3月のことだった。電話で近況を尋ねる私に、彼はメディアウォッチを離れて独立し、出版業に本格的に注力する計画を語ってくれた。私は、泥沼の政治闘争に煩わされるよりも遥かに素晴らしい道だと彼を応援した。不毛な訴訟に巻き込まれることは、精神的にも金銭的にも人間を疲弊させるものだと考えていたからだ。彼は「近いうちに正式に新しい出版社を立ち上げたら、また連絡する」と言い残し、電話を切った。

しかし、それから半年後、控訴審の判決をわずか2週間に控えた2025年11月14日、黄氏は突然、遺書を残して自ら命を絶った。遺書には、タブレットPC事件は明白な捏造事件であり、濡れ衣を着せられたメディアウォッチの潔白と無罪を強く主張し、真実・自由・人権・法治が失われた現代の世態を厳しく糾弾しながら自決する、という趣旨の内容が記されていた。享年48歳だった。裁判は被告人死亡により公訴棄却となったが、共に起訴されていた邊氏が二審でも拘束されたことを見れば、裁判がそのまま進行していれば黄氏も再収監を免れ得なかっただろう。彼はその結果をあらかじめ見越していたものと思われる。

＜サバイバーズ・ギルト＞

サバイバーズ・ギルト（生存者罪悪感: Survivor's guilt）という言葉がある。災害、事故、事件、あるいは職場での大量解雇などに遭遇した際、「自分だけが生き残った（あるいは被害が少なかった）」ことに対して抱く強い罪悪感や、「もっと何かできたのではないか」という自責の念を指す。黄氏の悲報に接し、私の脳裏に最も強く浮かんだ言葉は、まさに「サバイバーズ・ギルト」であった。

振り返れば、私の周囲で自らの信条を曲げなかった人々は、一様に苛烈な嵐に見舞われた。最初に黄氏を紹介してくれた医師のH氏は懲役刑（執行猶予）を受け、反日問題において黄氏と意気投合した李宇衍博士は、徴用工像に対する批判を提起したことで名誉毀損で告訴され、果てしない裁判闘争に巻き込まれ苦汁をなめさせられた。そして黄氏は、大手メディアを批判したという理由で実刑を言い渡された後、控訴審の判決を前に、ついに自ら命を断ってしまった。誰もが堂々と自身の主張を掲げたがゆえに、世間から巨大な禍を被ったのである。しかし、彼らに比べて臆病で小市民的な私は、何一つ傷を負うこともなく、一人で生き残ってしまった。その重苦しい事実が、私に深い罪責感としてのしかかる。

黄氏の場合、あまりに一つの問題に執着しすぎたのではないかという思いもあるが、逆説的にそれこそが黄氏という人間の最大の魅力であり純粹さであった。初めて出会った時から、彼は取るに足らない私の文章をいつも高く評価し、激励を惜しまなかった。同時に、私に多くの知的な動機付けを与えてくれた、かけがえのない存在だった。それゆえに、彼から受け取るばかりだったこの大きな恩義を、今や永遠に返す機会を失ってしまったという後悔が、胸を締め付ける。

彼はジャーナリストとして、そして特有の凄まじい行動力によって、周囲の多くの人々に新鮮な刺激を与え続けた人物である。これからは、彼が持っていたあの勇気と行動力の、せめて真似事だけでもできる人間にならなければ、と心に誓っている。この17年間にわたる大切な友情に深い感謝を捧げるとともに、故人の明白な潔白と平穏を祈り、謹んで故・黄意元氏の冥福を祈る。